

研究室にもどつて

川越淳 二

報告にたいする真剣な討議、出席者全員をつつむフアミリアな感情、仙台の第一回報告会は成功であった。本会の主旨と構成員とからすれば、それは当然のことである

う。けれども、いわゆる学会の大会が研究的なものよりも社交的なものになりつつある傾向が、つよいこに、両者を兼ね備えたあの日の雰囲気は、「村研」の性格を端的に物語るものといえる。この点、直接、会の運営にあたられた各位に、深謝するとともに、われわれもまたそれを守り続けるために努力しなければならぬとおもう。

しかし、このことはあの報告会に欠点がなかつたということではない。むしろ、「村研」への期待が大きければ大きいほど、欠点が見につくのは自然であろう。いちいちあげることは、この際できないが、総括的にいえば、共同課題に対する出席者各自の準備不足と事前連絡の不十分につきるのではないかとおもう。そのために討議の際に焦点がなかなかあわなぬという結果を招いたのである。そこで次回には、この欠点を除くために、かなり困難かとも思われるが、つぎのことも提案したい。決定された共同課題について、(1)半年位前に報告者や題名を全会員に通知すること、したがって、それは前に報告希望者および題名を募集する必要があるのである。(2)報告決定者は、報告要旨、できれば詳細な資料を、少くとも一ヶ月位前に会費の手許にとどけるように準備することによって、費向を充分に検討しておく。(3)出席者は、それを充分に検討しておく。(4)討議の際、司会者は——委員

を提起する。(5)討議はそれをめぐつておこなわれる。これはいま思いついたことであるが、報告会運営における一例として、参考にして頂けると幸いとおもう。このことは研究報告が報告として用意され研究されるものでなく、共同課題は全会員全部が研究するという主旨からみて当然可能であるとおもう。

これに陶運して、地区研究の必要が考えられる。当日の席上、有賢先生から、支部について提案があり、はっきりした結論はでなかつたと記憶するが、反対者の意味する支部は研究会の組織としての、つまり会務運営上の、単位としての支部であり、提案者のそれは、研究単位の支部を意味していたようにうけとれたのであつて、後者の意味の、つまり近接地区に居住する会員の共同研究のための単位としての支部は、研究上——運営上ではない——有効ではないかとおもう。殊に、報告会での報告・費向・討議などについて、この研究単位が事前・打合せできるならば、一層効果的であろう。これらは会員相互の連絡で充分可能のようにおもわれる。

研究室にもどつてから、当日のことを思い出して、つくづくと考へられるのは、いままでの学者が、あまりに、自己の立場に執着して、対象に忠実でなかつたような気がする。科学が科学として成立するためには、このことは勿論必要ではあるが、しかし一方、解決すべき課題や対象がまず存在して、

それに対して、有効な科学がすべて動員され、おたがいに協力することによって、それを解決して、科学ははじめて人間のための科学となりうるのではなからうか。当面の提案としては、わがくにの村落の将来に想いをほせつつ、現実の問題を解決しようとする「村落の科学」が、各専門科学の領域の問題とは別に、提唱されてもよいのではないかということである。（愛知大学）